

「潰瘍性大腸炎手記」匿名希望 45 歳

2013 年 9 月 23 日

(本当はこの患者さんの手記のタイトルは「潰瘍性大腸炎を松本医院で短期に完治させた手記」とでもしてもらったらピッタリの症例でした。正確に言えば、「2 年半以上苦しんだ潰瘍性大腸炎が、松本医院の免疫を抑えない治療の助けを借りて、自分の免疫で1ヶ月半で治した」というタイトルがもっと分かりやすかったのに。読んでもらったら分かるように、初診の血沈を検査中でもほとんど正常に近かったので、看護婦さんがこの患者さんに「あなたの潰瘍性大腸炎 (UC) は、早く治りますよ」と予言した通りに治ってしまったのです。

全ての病気は炎症という形で現れます。この炎症の度合いを見るのに最も鋭敏なのは血沈であります。血沈検査をしても100円しかもらえないので、大病院では近頃ほとんどやらなくなってしまいました。しかも血沈の検査は検査屋に外注することが禁じられているので、病院内でしかやらざるをえないのです。血沈をやるのに必要な手間と時間と試薬が100円では割が合わないのです。多くの病院内でやられなくなったのは非常に残念です。血沈の結果は1時間で分かるので、初診の最中に結果が出るので、待っておられる患者さんにすぐに伝えることができます。

この手記で欠けているのは、自分の免疫を自分で抑制し、アトピーを潰瘍性大腸炎に変えてしまったという考察がないことです。専ら彼は大好きなラーメンのせいにしてはいるようですが、そのラーメンの中に大量の化学物質が入っていることを一言も指摘していません。病気というのは5大栄養素と水と酸素以外の異物が侵入して、初めて病気の原因となるのです。膠原病やアレルギーの原因は化学物質であるのです。これらの病気の原因である化学物質が侵入するだけでは病気になる訳ではありません。その異物を免疫で認識できる能力を発揮してくれる MHC II 遺伝子の多様性を患者さんが生まれたときから持ち合わせていなければ生じないのです。さらにこれらの異物と戦うときに膠原病になるか、アレルギーになるかは、免疫がIgGという抗体を作って化学物質と戦えば膠原病となり、IgEという抗体を作って同じ化学物質と戦えばアレルギーになるのです。

ここでまずどのようにしてIgGがIgEになるのか、さらにどうして免疫を抑えればIgGがIgEにならないのか、さらにIgEのアレルギーがどうしてIgGになるのかについて、再びエッセンスだけを詳しく書きましょう。私にとっては非常に簡単な免疫学の真実であるのですが、患者さんにとっては、なかなか理解しにくいようです。しかしながら真剣に10回読み返せば全ての患者さんは理解できると思います。だってこの理論によって全ての膠原病は治るという世界で唯一の正しい

理論であるからです。この理論は世界で私だけが知っているかどうかは分かりませんが。ワッハッハ！もっと詳しく知りたい人は「自己免疫疾患はない」という論文を読んでください。

それでは、膠原病になったりアレルギーになったりする違いはどうして生まれるのでしょうか？まず化学物質が人体に入ると、まず抗体を作るB細胞がIgGを作り始めます。免疫を抑えなければ、すぐにIgGをIgEに変えてアレルギーになってしまうのです。IgGをIgEに変えることを抗体のクラススイッチといいます。それではどうしてIgGがIgEになるのでしょうか？IgGは異物を殺すために作られるものです。IgEは異物を排除し、最後は共存するために作られるのです。元来、化学物質は殺すことはできないものですから、免疫を抑えない限り簡単にIgGがIgEにクラススイッチできるシステムが免疫のシステムに内蔵されているのです。従って赤ちゃんに膠原病がなくアトピーが全てであることがお分かりになるでしょう。なぜならば赤ちゃんはストレスがないので簡単にクラススイッチができるのです。

それでは何が抗体を作るBリンパ球にクラススイッチを起こさせるのでしょうか？それはヒスタミンを作ってアレルギーを起こさせる肥満細胞がインターロイキン4というサイトカインを作り出すことによって、Bリンパ球が持っている遺伝子のAID遺伝子に命じてクラススイッチをさせるのです。

それではどうして肥満細胞がインターロイキン4を出すことができるのでしょうか？肥満細胞の膜には殺しの抗体であるIgGと結びつくレセプターがあります。免疫は化学物質を、最初に出会った当初は殺すべき異物と認識して、Bリンパ球にIgGを作り続けさせるのですが、いつまでもIgGを大量に作っても殺しきれないので、このIgGは身体のあらゆる組織に存在する肥満細胞と結びつくようになります。このとき肥満細胞は人体に殺すべき敵ではない化学物質と、免疫が戦っていることを認識し、自分の出番であることに気づくのです。このときにはじめてインターロイキン4を肥満細胞から出し始めるのです。ここでIgGを作っているBリンパ球にインターロイキン4が結びつくと、AID遺伝子はIgGからIgEにクラススイッチするための遺伝子の組み換えを初めてやり始めるのです。こうしてこの患者さんが経験したように、IgGの膠原病からIgEのアレルギーとなるのです。アレルギーはご存知のようにアトピーが一番良く知られていますが、気管支喘息もアレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎、花粉症、アレルギー性咽喉頭炎、アレルギー性下痢も全て同じメカニズムで起こり、IgEと化学物質とが戦う戦場が違うだけは、皆さん既にご存知でしょう。

それではなぜ赤ちゃんは膠原病がなく、アトピーに簡単になるのでしょうか？ストレスがないからです。免疫のクラススイッチとストレスの関係について述べ

ておきましょう。ストレスを耐えるために、全ての人は副腎皮質ホルモン、つまりステロイドホルモンを必ず出します。ステロイドホルモンがなければ、脳はストレスに耐えることができなくなり、鬱になったり気力がなくなったり、果ては自殺に追いやられることがあるのです。ストレスが脳にかかると、心も身体もそのストレスに耐えるために、脳から副腎皮質に副腎皮質ホルモンであるステロイドホルモンを作れと命令します。このホルモンが作られるのでストレスを乗り切ることができるのです。それではストレスに耐えるとか、ストレスを乗り切るのには何が必要でしょうか？エネルギーです。

皆さん、人間が生きるために一番エネルギーを使うのは何だと思いますか？まず脳の働きに用いるエネルギーが1番であり、異物との戦い、つまり病気に勝つために用いるエネルギーが、2番であります。この2つのエネルギーを同時に使うことは、人間の限界を超えることになるので必ず脳にエネルギーを使っている間は、ストレスホルモンであるステロイドホルモンを出して2番目の免疫に用いるエネルギーを最小限にしているのです。その意味を詳しく説明しましょう。ついでに皆さんにお尋ねしますが、この2つ以外に特別に大量にエネルギーを使う生命活動は何かありますか？よ〜く考えてください。実はないのです。

エネルギーはなぜ必要なのでしょう？皆さん、生きるということはどういうことなのでしょう？命とは何なのでしょう？人の命は何からできていますか？60兆の細胞からできています。この60兆の細胞がひとつひとつがエネルギーを用いて生き続けることができるので、私たちは生きていくことが実感できるのです。実はこのエネルギーの物質的な形はATP（アデノシン・トリフォスフェイト）であります。理科系の勉強をした人であれば全てご存知でしょう。このATPを人体のエネルギー通貨と呼ぶこともご存知でしょう。

このひとつひとつの細胞が生き続けるのに何が必要なのでしょう？エネルギーです。このエネルギーの元は何なのでしょう？5大栄養素と水と酸素であります。エネルギーを作り続けるために、私たちは毎日植物が作り出した栄養を飲み食いし、さらにこのエネルギー源を燃やすために空気を吸っているのです。このエネルギーを使って生き続けている細胞とステロイドの関係はどうなるのでしょうか？ステロイドはあらゆる60兆の細胞に入り込んで、簡単に細胞の働きを一時的に止めることが理論上可能なのです。

だからこそストレスがかかって、ストレスに対抗するために必要な細胞だけがエネルギーを使うことに専心すれば、ストレスに耐えやすくなるのです。例えばステロイドを無限大に投与すれば人間はどうなるのでしょうか？おそらく即死でしょう。だって全ての遺伝子の働きを止めてしまうからです。もちろんこのような人体実験はされたことはないのですが、ラットやマウスでは既に行われていま

す。なぜならばエネルギーが使われるシステム、つまり細胞の遺伝子の発現をスタートさせる全ての転写因子のONをOFFに変えてしまうと、細胞は働くことができなくなるからです。だからこそストレスがかかったからといって無限に副腎皮質はステロイドホルモンを作り続けることができないようなシステムに人体は作り上げられているのです。副腎皮質ホルモンが多すぎると、脳から副腎皮質にステロイドホルモンを作ることをやめさせるようになっているのです。

従って精神的なストレスに対抗するためのエネルギーを残しておくために2番目に大量にエネルギーを使う免疫の働きを一時的に抑えて、心の戦いを続けるのです。つまり現代文明においては人体にとって化学物質が一番の異物になります。この異物との戦いにおいて一時的にステロイドにより免疫を抑えにかかるシステムが38億年の人類の進化の中で生まれたのです。もっと具体的に話をしましょう。膠原病になった人は必ず自分自身のステロイドホルモンでクラススイッチの遺伝子であるAID遺伝子の転写因子をOFFにしてストレスに対抗したか、次に治療と称して無理矢理医者に入れ続けられたかのどちらかによって免疫を抑えてきたのです。

見方を変えてみましょう。この世に無理矢理エネルギーを使わなければならない事態がなければ人間は幸せではないのでしょうか？つまり自分の思い通りに全て事が運ぶというストレスのない毎日に加えて病気がなければ、皆さんどこに不必要なエネルギーを使う必要があるのでしょうか？ただ毎日毎日幸せに生きるために5大栄養素と水と酸素は最低限必要であります。それ以上何に特別なエネルギーを使う必要があるのでしょうか？何もないでしょう。逆に言い換えましょう。死にそんな病気や（現代においてはほとんどなくなりましたが）、心のストレスがかかったら、心のストレスはどうにでもなれと思いませんか？心のストレスを諦めることによって、エネルギーを病気を治す免疫の方に向けているといえます。もっと状態がひどくなれば、例えば死ぬような病気にかかり、しかも耐えられないストレスにかかれば自殺するでしょう。現代は病気で死ぬ人がなくなりましたが、心のストレスで自殺する人が毎年毎年3万人前後いるのです。このような人たちは残念ながら心のストレスに耐えるエネルギーが枯渇した人といえるでしょう。

だからこそ私は言い続けるのです。あらゆる膠原病は自分の心で作ったのだから、心のあり方を見なさい、と患者にいつもいつも忠告するのです。心のストレスに耐えきれなくて自殺すれば一巻の終わりです。さらにこの患者さんのように、一生治らないと言われている（実はそうではないのですが）潰瘍性大腸炎やクローン病になってしまえば、一生が病気で苦しまねばならない運命を背負うこととなります。その運命は自分の心が招いたものですから、ステロイドホルモンを出さない心の生き方が一番大切になるのです。その心のあり方が『諦める、受け入

れる、どん欲を捨てる』の3つの心がけだけです。なかなかこのような心の境地になれるものではありませんが、一生治らない病気を自分の免疫で治したければ、この心がけを実践する以外にないのです。)

1) 会社の健康診断

2010年11月ごろ、会社の健康診断の便潜血検査で「陽性」の結果を受け取った私は、精密検査を受けるように会社から指示を受けました。そして検査を受ける病院を5つの病院から選ぶように選択を迫られたのです。2ヶ月前に単身赴任で滋賀に引っ越して来た私は滋賀の病院の知識は皆無でした。そこで鎮静剤を使用し一番楽に内視鏡検査を受けられそうなH病院を選択しました。この選択が後の私の運命を決定したとはこのときには微塵も感じていませんでした。(この「私の運命を決定してくれたH病院」というのは、この手記を最後まで読んでいただければ分かるのですが、H病院に不審を感じて、H病院の医者が信用できなくなったために松本医院のホームページを見つけることができ、一生治らない病気を治すことができたという意味です。)

もしこのとき違う病院を選択していたなら今でも薬で抑えるだけの治療を受けていたかもしれません。

2) 潰瘍性大腸炎の診断

2週間後にH病院で内視鏡検査を受けるまで、私は気が気ではありませんでした。癌だったらどうしようと思っていたからです。それまで大便が出たときにそのチェックをほとんどしていませんでしたが、その2週間の間にずっとチェックをしていたら、あるとき小さな血の塊が粘膜とともに便器に浮いていました。心配になった私は即別の大きな病院に診察を受けることにしました。

(42歳で便の潜血検査で陽性が出たからといって大腸がんの可能性を考えることはほとんど杞憂です。まず考えられることは、内痔核か外痔核か、軽い裂肛(肛門の粘膜の裂けた傷)をまず考えるべきです。次に考えるべきことはやはり今はやりの膠原病である潰瘍性大腸炎(UC)かクローン病(CD)であります。2002年には2万人であったこれらの炎症性腸疾患(IBD)が、2012年では15万人を超えています。つまり毎年1万人のIBDの患者が生まれているのです。しかも現代医療は免疫を抑える薬しか作れませんから、病院にかかればかかるほど、ますます自分の免疫で治すことができなくなり、IBDの累積患者数がどんどん増えていくのです。悲しいことです。

現代の病気の原因は化学物質とヘルペスしかないのにもかかわらず、さらにそ

の事実を知っているにもかかわらず全世界の医学者の誰一人として公表しないどころか、膠原病は全て免疫を抑える薬によって治らなくされていることも口にしなないことが悲しくてなりません。膠原病を作るのは自分であり、治すのも自分であるというたったひとつの病気を治す原理原則が世界の全ての人々が知るようにになれば医者も病院も製薬メーカーも必要なくなってしまうからです。ただ手術をする外科医は最後まで残ることになるでしょう。私は外科医ではないので、私の仕事もなくなってしまうことになるでしょうが。ワッハッハ！)

「近々内視鏡検査を受けるのですね。それなら心配ありません」

私が症状の説明をしている途中でその説明を一方向的に打ち切られ、高圧的な態度をとったその病院の先生の話では、余計に心配になりました。何が心配ないのかまったく説明がなかったからです。

(この患者さんは物事を常に理路整然と考えておられます。現代の医療は医学という学問にのっとった医療ではありません。一番見聞するのは、他の医院で治らない患者が当院に来られることがあります。抗炎症剤を必ず飲まされてきます。抗炎症剤では一時的に症状は取れても風邪も治らず、ヘルペスも減ることはありません。このような患者さんに、そのような医者は何が原因で炎症が起こったのかと聞きますが、どの患者も未だかつて炎症の原因を説明してくれた医者に出会ったことがないのです。つまり病気の原因をどの医者も説明することがないのです。

これと同じく、まず潰瘍性大腸炎やクローン病だと診断されると、医者の言う決まり文句があります。まず言うのは、「原因が分からない」「絶対に治らない」このふたつの言葉に何の論理的な繋がりがあるのでしょうか？全くありません。論理がない学問というのは、学問ではありません。従って現代の医学は学問ではないのです。現代の医学という言葉から学をはずすべきです。医療は病気を治すために存在しているのですが、現代は医者が免疫を抑える薬を売りまくってお金を儲けているだけです。お金は絶対に儲けるべきですが、正しいこと、つまり病気を治してこそお金は稼ぐべきです。国民皆保険の名において、見かけは安いお金で、ときには特定疾患（特疾）の病名をつけて患者にはタダで病気を作っているだけなのです。医療機関が絶対にとりっぱぐれのないシステムが特疾の制度なのです。

ひとりひとりの医者は人間としては立派な人であり、職業集団としてみたときに優秀であり人間性もあるのですが、組織が決めた標準治療という名の医療をやるように医療集団という組織を動かしている権力と権威を持ったトップの人たちが、利益集団を守るために押し付けて間違った医療をせざるをえないという現実には誰も変えることができないのです。私がいかに口汚く医療集団をコケにしたところで何も変わりません。しかしそれが現実であるという真実は伝えざるをえ

ないのです。)

こうなっては内視鏡検査を受ける日まで待つしかありませんでした。そしてそれから何をして過ごしたのかまったく記憶にありませんが、そうこうしている内にようやく内視鏡検査を受ける日がやって来ました。内視鏡検査は約20年前に1回だけ受けたことがありましたが、そのときも血便が出たからであり、しかし原因不明でした。今考えるとこのときから私の病気は始まっていたのかもしれませんが、無事、内視鏡検査は終わりましたが、そのときは担当医の方からは「潰瘍が治った後がありました。結果は数日後に出ます」という説明だけありました。

そしてその結果は数日後、会社から説明がありました。

「潰瘍性大腸炎という病気です。難病に指定されていて大腸がんのリスクがあります」しかしこのとき私にはショックはありませんでした。今までの症状に病名がついただけだと思っていたからです。逆に、癌ではなくて良かったとホッとした感さえありました。

小さい頃から腸の弱かった私は、ことあるごとに下痢になっていました。そしてこの慢性的な下痢の状態が当たり前だと思っていたのです。このとき初めて、これは体質ではなく病気だったんだと認識しました。

3) 潰瘍性大腸炎の治療

私は詳細な説明を聞くためだけに内視鏡検査を受けたH病院に足を運びました。最初はH病院で治療を受ける気はまったくなかったのですが、他のどの病院がいいのかよくわからないし、先生も親切だし、もし何かあれば病院を変われば良いという軽い気持ちで私はとりあえずH病院で治療することにしました。

「アサコールを処方します。特定疾患の申請を行ってください」

私は直腸型の潰瘍性大腸炎で軽症。このときアサコールは新薬であったので2週間以上の処方できないと言われました。よってしばらくは2週間毎の診察と処方とするということが決まりました。その後、何回かの診察で、1ヶ月に1回の処方と受診になり何事もなく生活をしていました。ちなみに、私の場合調子がいいときは食事は特に気にせず食べてもいい、調子が悪いときだけ食事制限をすればいい。また調子がいいときでも食べて調子が悪くなった食べ物だけ避けるようにと指示されました。私はラーメンが大好きで、頻繁に食べていましたが潰瘍性大腸炎と診断されてから半年くらいたったときから、特定のラーメンを食べた翌日に激しい下痢を起こすようになり、更にN店のラーメンを食べると下痢の他に熱がないのに、40度の発熱のときのような倦怠感に見舞われるようになり、それが3日間続くようになったのです。しかもどんなに調子がよいときでもその症状が出るようになり、

私はN店のラーメンを食べるのをあきらめるようになりました。また外食が多かった私は家の近くの食堂のラーメンもよく食べていたのですが、これでも同じ症

状を発症するようになり、さらにこの食堂のラーメン以外の定食を食べても下痢をするようになりました。このようにじわじわと食べられないラーメンの種類が広がっていきました。

私は人生の楽しみの1/3を奪われた気持ちでいっぱいになりました。

4) 帯状疱疹の発症

2011年のゴールデンウィーク前のある日、私は胸の辺りに発疹が広がっているのに気づきました。嫁に相談したところ、病院に行ったほうがいいのではないかとということでH病院の近くにある皮膚科専門の病院に行くことにしました。土曜日にその皮膚科に行くと、ものすごく混んでいて、3時間後の診察となりました。いったん家に戻り指定の時間に診察を受けに行くと、初老の少しぼっちゃり気味の先生から帯状疱疹と診断されました。ヘルペスウイルスが神経に住み着き、悪さをする病気だそうです。

潰瘍性大腸炎の治療中でありアサコールとラッグビーを服用している旨を伝えると、痛み止めは一応出すけど、飲まないでください。腸に大きな負担がかかりますと言われました。また、2,3日で痛みが出てきますよという警告を受けたにもかかわらず、まったく症状がなかったので診察を受けた2日後でも私は家で安静にせず家族と買い物に出かけたりしました。しかし、その途中急に倦怠感に襲われ、胸がちくちくするような感じがしました。さすがにこれはまずいと思い、すぐに1人で滋賀に向かいました。もちろん次の日から仕事であったのでそのために滋賀に帰ってきたのですが、このとき私はこの病気の恐ろしさをまったく理解していませんでした。次の日から私は胸が焼けるような痛みで苦しむようになりました。もちろん仕事に行くどころではありません。動いていないときはまだ痛みは少ないのですが、動くと酷く痛むのです。私はびくりとも動かないようにしているのが精一杯でした。そして、この病気を嫁から聞きつけた親から電話がかかってきました。

「この病気を甘く見たらあかん。昔は疱疹が帯状に出たときに死ぬって言われてたんやで。絶対安静や」ピシヤリと言われました。それを聞いてビビった私は完全に治るまで会社を休むことにしました。治るのに4日間かかりました。

5) 黒い便

2012年9月下旬頃、形がおたまじゃくしのような黒い便が2回出てしまい、すぐにH病院に診察に行きました。消化器上部での出血の可能性があるということで胃カメラ検査を受けることになりました。しかし検査結果は「異常なし」。当然私は原因不明という診断結果になると思っていたのですが、最後の先生の言葉に耳を疑いました。「アサコールのカプセルの色がそのように見えたんだろう」素人が考えても分かるくらいいくらなんでもそれはありえません。アサコールの

茶色ではなくおたまじゃくしの黒色です。
石油のような真っ黒な色です。さすがに見間違えません。でも実物を見ていないからそうとも考えたのではと思い直しました。
釈然としないまま、考えたことは「今度から全部、大便の写真を撮って見せよう」でした。

6) めまいと抜け毛

2013年1月下旬頃、めまいが1週間止まらずにH病院の診察に訪れました。実はめまいは以前からちよくちよくあったのですが、すぐに治っていたので気にしていませんでした。また、以前から洗面台と風呂場で抜け毛が大量に発生し、育毛剤（SCALP-D）を使用していたのですが、あまり効き目は感じませんでした。抜け毛に関しては歳のせいだからとと思っていましたのであきらめていたのですが、嫁から「50歳までは耐えなあかん。病院にいったら相談してよ」と言われたので以前に帯状疱疹で診察していただいた病院にいきました。

「抜け毛は何をしても抜けるものは抜ける。薬での治療はずっと飲み続けなければならぬし、効くかどうかはわからない。しかも1万円/月かかる」と言われたことを嫁に伝えると、「じゃああきらめよう」ということになりました。

さて、H病院での診察ですが、症状を話すと先生は薬に関する書物を調べ始めました。私はこの行動が大いに心に引っかかりました。そして、ひとこと「原因はわかりません」家に帰った後、「患者に与える薬のことを完璧に把握していないのか」という疑惑に駆られ、インターネットでアサコールの副作用について調べました。なんと、副作用の項目に「めまい、抜け毛」の文字があるではありませんか。私はその項目を印刷し、H病院に行って「これじゃあないですか」と先生に見せました。先生は「じゃあ薬を変えましょう」と言ってアサコールからペンタサに変更になりました。

それから1週間はめまいがあつて「薬のせいではなかった？」と思ったのですが、それ以降、めまいは一度も起こることはありませんでした。また抜け毛もほとんど洗面台と風呂場にたまることはなくなりました。次の診察時、めまいと抜け毛が改善されたことを伝えると先生から「申し訳ありませんでした」とお詫びの言葉をいただきましたが、それでも私の髪の毛は元には戻ることはありませんでした。そしてこのときから芽生えた先生に対する不信感がなくなることはありませんでした。

7) 薬の副作用に対する確認

2013年2月初旬頃、薬の副作用、潰瘍性大腸炎に対する薬の考え方等いろいろな疑問に対する回答が欲しくなり、知り合いの奥さんが通っている潰瘍性大腸炎の権威の先生が勤めるD病院に行くことにしました。この病院では予約が3ヶ月

先までびっしりでそんなに待てなかったの、朝から行って診察の空き時間まで待つ作戦で行くことにしました。

朝8時半に到着したのですが、診察を受けたのは6時半。つまり10時間待ちました。しかし私はH病院とのあまりの違いにカルチャーショックを受けました。看護師の方もものすごく潰瘍性大腸炎に詳しいのです。「潰瘍性大腸炎にはどのラーメンが大丈夫でどのラーメンがだめなのか研究した論文があるからその一覧のコピーを渡しますね」そんなものがあるのかとびっくりしました。しかし今その一覧がないようなのでコピーをもらうことはできませんでした。

残念です。先生の診察では私は診察を受けに来たのではなく質問があつて来たことを伝え、次々に質問をしました。先生は全ての質問に対し、私が納得できる回答をしていただきました。さらに質問があればいつでも電話をかけてください、ととても親切にしてくださいました。それで私は治療をするならこういうところで受けるべきだと思いましたが、それは非現実的でした。

滋賀の家からの距離がネックでした。通える距離ではなかったのです。

8) 潰瘍性大腸炎の悪化

2013年3月中旬頃、会社の要請のための定期的内視鏡検査で、私の潰瘍性大腸炎が悪化していると診断されました。去年の定期検査では「よくなっているところと悪くなっているところがある」という結果でしたが様子見ということで、引き続きアサコールを服用していましたが、1月下旬にペンタサに変更したせいなのか、それに関係なく病状が悪化してしまったのかそのときにはわかりませんでした。「ペンタサ注腸を使ってみましょう。これで薬が直接患部に届くようになります」ペンタサの飲み薬とペンタサ注腸で治療することになりました。始めは週1,2回でいいということでそのようにしていましたが、下痢の症状が続いていたので毎日ペンタサ注腸を使用するように指示されました。それで一時期は収まっていました。

9) 慢性の下痢と下血

2013年6月17日頃から、慢性の下痢と下血が続くようになりました。2週間続いたので21日と28日に受診をしにいきました。21日にペンタサの量を増やしたのですがそれでも止まらなかったの、ついに以下のことを言い出しました。

「あまり使いたくないが、ステロイド注腸を使いましょう。後、イムランを処方します」「ステロイド注腸は長期に渡って使用すると中毒になります」

「潰瘍性大腸炎とリウマチは免疫が自分を攻撃するという点では同じ原因です。ただ場所が違うだけです。イムランはその免疫を抑えて、攻撃を少なくします」私はこの説明に激しく抵抗感を覚えました。免疫を抑える？おかしいのではないか？実は22年ほど前、学生のとときに風邪が1ヶ月以上治らずに休みがちになって

いた私を心配した大学の教授が東洋医学の病院に入院するように手配していただき、そこで断食療法を行ったのです。効き目は想像をはるかに超えるものでした。まさしく生命あふれるのが実感できるような状態になり、同級生からは「髪の毛が増えたよ」と言われました。そこで学んだことは人間の免疫力が病気を治し、生命力を高めるというものでした。しかし「もうこれしか薬はない」「イムランで治療している患者さんも大勢いる」という説得にしぶしぶ使うことにしました。このとき私はステロイド注腸の方が強力な免疫抑制剤であることを知らなかったのです。

10) ステロイド注腸とイムランによる治療

インターネットで調べてみると確かにイムランで治療して何年という方がいました。私はステロイド注腸とイムランを使用するしかありませんでした。しかし、ものすごい吐き気が起こるようになり、7/3に吐き気があるのでイムランを中止してもいいかを聞きに行きました。すると先生は信じられないことを口走ったのです。「それは思い込みでなっている。今イムランを中止しないほうがいい」私がいくらイムランの副作用で吐き気が起こっているといっても聞き入れてくれません。あきれてしまった私は、すぐに家に帰り、インターネットでイムランの副作用について調べました。

「イムランの主な副作用には、食欲不振、吐き気、嘔吐などがあります」と思いっきり書いていました。一方ブログで「始めは吐き気があるが我慢するとそれは収まる」という書き込みがあったので我慢して服用していました。しかし7/5も相変わらず吐き気が止まらなかったため、イムラン中止を再び訴えに行きました。血液検査の結果を見た先生は「血液検査の結果は異常なしだけでも、そんなに言うならイムランをいったん中止しましょうか」しかしイムランを中止しても1週間、吐き気はおさまりませんでした。

11) ステロイド注腸の中止

2013年7月10日、少量の血尿が出たためH病院を訪れました。もちろん写真を撮っていました。写真を見て先生は確かに血尿ですねと認めたけれども、尿検査の結果異常なし。そこでまたもやとんちんかんな説明を受けることになりました。「スポコン漫画で特訓をして血尿が出たりしているシーンがあるでしょ。激しい運動をして筋肉が壊れて出るミオグロビン尿です」激しい運動をした覚えのない私はそれはないと否定しました。そもそもステロイド注腸を使用している為、通常では放っておく少量の赤い尿にも過敏になって病院に来たので、その原因を早く取り除きたく思い、来週の水曜日に受けることになっている内視鏡検査を今週の土曜日にできないかと尋ねました。

「土曜日は患者さんが多いから私の体力が持たない。今日は患者さんが少ないので今から検査しましょう」このときすでに下痢、下血はなく調子がよかったので私は二つ返事で、内視鏡検査を受けることにしました。

今回は鎮静剤なしで内視鏡検査を受けました。先生は内視鏡検査がとても上手で検査中不快感はあまりありませんでした。

私の腸の映像がスクリーンに映し出されました。ステロイドが劇的に効き、以前に潰瘍があった場所が全てきれいに治っていて血管までも再生しているくらいピンク色になっていました。

「よかった、本当に良かった」先生はとても喜んでくれました。

しかし私は心の中でまったく違うことを感じていました。

「しかしこれは100%再燃する」こう思っていたのには理由がありました。

10) で書いたように、このときからすでに病院を変えることを心に決めていた私は少し前からネットでいろいろな情報を検索し、その折に潰瘍性大腸炎が完治したという方の複数のブログを閲覧し、潰瘍性大腸炎は完治する病気であるということを知っていたのです。ネットでの情報はデマが多いと考える方もいらっしゃるかと思いますが、一番信用できないのが例えばこのサプリメントが効きましたなどとお金がからんだ場合です。しかし、そのブログを書いた人が得をしないのにもかかわらず、その情報を発信している場合、ブログの内容、例えば自分が病気でないとわからない情報など、こと細かく書かれている場合には、大抵は信用できると判断できます。またそういう方は治療するためのものすごい情報量を持っていてそれを惜しげもなく公開していますので、偽者との違いがよく分かります。最近では結構松本医院で治療を受けた方のコメントも見受けられますね。さて、100%再燃すると思った理由ですが、松本医院のサイトではないのですが、はじめに私が信用した他のブログでの情報で「完治する方は1回目の発病で完治するパターンが多いが、再燃された方は、繰り返し再燃し完治しにくい」とありました。そして私は1回再燃しているからです。

このことはさておき、やっとステロイドを中止することができてほっとしていたのですが、なんと先生は中止していたイムランの服用を再開するように強く勧めてくるではありませんか。昨日やっと吐き気がおさまったばかりの私は、全力でそれを拒否しました。同時に「このままでは一生薬づけにされて殺されてしまう」と本気で思い、死への恐怖感から背筋が凍えるような感覚に陥りました。とりあえず、ペントサとペントサ注腸で様子を見るということになりましたが、私はこの時点でもうこの病院に行く気はありませんでした。

12) 松本医院の発見

2013年7月13日、私は以前に質問をしに行ったD病院に病院を変更したかったのですが、距離の問題から嫁からの反対を食らい変更する病院をどうするかで途方にくれていました。そしてこうなったら何年掛かるかわからないけど自分で治

そうと考えていました。完治した方の共通点は、

a)薬を使っていない

b)血液がきれい

c)食べ物のこだわり

の3点でした。

そのヒントを頼りに自分に合いそうなものを片端から試してみる。この方法しかありませんでした。他にヒントになるものがないかとさらにネットで検索しているときに見つけたのが松本医院でした。私は最初強烈に西洋医学を批判している文面を見て半信半疑でしたが、病気の原因、完治の方法などの理論的な説明があり、とんちんかんな説明にうんざりしていた私には目からうろこでした。しかも「病気は自分の免疫力で治す」という22年前に学んだことと同じ思想が書かれているではありませんか。さらに運が良かったことに私の家から電車で30分で通えるところにあります。今のH病院と大差のない時間です。

自分で治すよりかなり心強いので、当然私は7/17に松本医院に行くことをすぐに決め、嫁にもそのように伝えました。

13) 松本医院での診察

2013年7月17日、9時半前に高槻駅に到着した方向音痴の私は別方向に行ってしまう、迷ってしまいました。頼りにしていたiphoneのマップアプリが上手く動作しなかったのです。仕方がなく医院に電話をかけ、無事に到着することができました。医院に入ると思ったより患者さんは少なく、受付では最初に今まで服用した薬の種類と量を記載する用紙を手渡されました。

何年も前のことで、しかも途中で薬を変更していたため、思い出すのに苦労しました。記載してみると改めて大量の薬を飲んでいたことを認識し、ぞっとしました。最後に先生の理論を理解しているかという問いには、一部理解してしない(だったかな?)にマルをしました。あれからずっと松本医院のHPの手記と理論を読んでいましたが、大体の理論は理解しているものの、先生が「少し難しくなりますが、」と言って免疫の詳細な説明の部分が理解できていなかったのも、理解しているにはマルをしませんでした。大体の理論を理解している場合は、右端の理解をしているにマルでいいようです。さて、私は先生に会うのを楽しみにしていました。あの理論を考えた人はどんな人だろう、世の中にはすごい人がいるものだと思っていたからです。

私の名前が呼ばれ入っていくと、そこには若い先生が座っていました。先生の息子さんが医者になっていたのです。松本先生に診察していただけるとばかり思っていた私はすこし面食らいました。しかし松本先生にも途中で私に話しかけていただき、何度も握手をしていただきました。

私は今までの経過を簡単に説明しました。ラーメンを食べるとひどい下痢を起こしさらに40度の熱が出たような倦怠感に襲われることを説明したとき、先生は

「～病だ（名前喪失）」とおっしゃいました。どうやらこれも薬の副作用でなっていたらしいのです。そして、今まで使用していたペンタサ、アサコールは全て免疫抑制剤であるということを説明していただきました。私はそういう認識がなかったのでびっくりしました。診察が終わった後、診察室の部屋を出ようとしたとき、漢方風呂の使用法などの説明のために呼び止められました。そして看護師さんは言いました。今、血液検査の血沈の結果を出している途中だけど、血沈の下がり方がひどくないので、あなたそんなに悪くないので早く治りそうですよ」

その言葉にウソはありませんでした。

14) 独自治療の開始

松本医院での診察後、私は本気でこの病気に取り組む決意をしました。「自分の病気は自分で治す」というほんとうの意味は自分でも治す努力をするということです。私は病院任せになっていた過去の苦い経験を反省し、自分で出来ることをしてみることにしました。そこで本やネットで勉強をした結果から、私が考えたもっとも重要なことは血液の浄化を行うという結論に達しました。

今までの偏った食生活のために体内に溜まってしまった毒素をすみやかに排泄し、血液をきれいにしなければ治りが遅くなると考えました。なぜならリンパ球などの免疫は血液に乗って運ばれるからです。これがもっとも威力を発揮する環境を整えることが治癒の第一歩であり今の私にできることであると考えました。そしてこのときから私の生活は一変しました。

15) リバウンドとアトピー

治療開始のわずか3日目、私は下痢をするようになりました。これがリバウンドなのか半年間肉を一切食べていなかったのに食べ出すようになったからなのかそのときは判断が付きませんでした。下痢は治ったり治らなかつたりして2週間続きました。そして、下痢が収まったその後に足の付け根から発疹が出るようになりました。発疹は両足と前の骨盤まで広がり、両脇のあたりにも出ました。アトピーのイメージと程遠かったので、インターネットで調べてみると「左右対称に出る発疹はアトピー」だそうで、これもアトピーと認識しました。これも2週間で完全に消えました。先生の理論どおりのことが私の身体の中で起こったので、この時点で私は完治したことを確信していました。

16) 最後の診察

2013年8月20日、私は完治した診断をしてもらおうと再び松本医院を訪れました。「しばらく経ってリバウンドが起こる人もいるから後1週間漢方を出してお

くよ」私はそれなら2週間分出して欲しいと頼みました。そして後2週間漢方、お灸、漢方風呂を続けることになりました。

しかし漢方の方は、食前薬のみになったので煮出す手間が半分になり少し楽になりました。そして何事もなく、2週間が過ぎ私は9月4日に電話でその報告をしました。ステロイドまで使ったというのに実質1ヶ月というあまりに早く治ったことに先生は「始めから潰瘍性大腸炎ではなかったのではないのか」とまで言われました。そして先生は心配してくださり「いったんこれで終了です。リバウンドが起こったらすぐに来て下さい」しかし私はもう二度とリバウンドが起こることはないだろうと思いつつ、次に起こるとしたら新しい化学物質が身体の中に取り込まれ、長期に渡り耐え難いストレスを受けない限り、また発病は起こりえないだろうと思っていました。ちなみに完治の判断基準として「便秘気味になる」というのがあります。45年間で便秘気味になったというのは記憶がないのにもかかわらず、確かに私は15)で完治を確信したとき便秘気味になっていました。先生が手記に書いて欲しいとおっしゃっていたので付け加えておきます。

17) 完治の証明

2013年9月14日、私は1年半ほど前に腸の調子が良い状態で食べたのに次の日から酷い下痢を起こし、「もう二度とラーメンは食べない」と叫んだことのあるP店のラーメンを家族で食べに行きました。今までの経緯を良く知っている嫁からは「そんなもの食べたら死ぬで」と言われましたが、無謀にもから揚げ定食(ラーメン付き)を注文し、食べ終わった後、帰る途中の車の中で嫁が言った言葉は「いつもは食べた後に必ずトイレに行っていたのに今回行かなかったね」でした。その言葉を裏付けるように私はいつもの癖でどこにいてもトイレのある場所は無意識のうちに確認していました。しかし今回は必要ありませんでした。さらに別の場所に行き、子供が残したアイスを半分食べてから家に着いたとたん、子供たちが争ってトイレに行っていました。私はいつものようにトイレ争いに参加(いつも1番に行きますが)しませんでした。自分でも驚きました。そして次の日、私のお腹はびくともしませんでした。

2013年9月21日、私は食べると次の日に100%下痢を引き起こし、40度の発熱もどきの倦怠感が起こっていたN店のラーメンにチャレンジしました。さすがにほんの少し不安はありましたが、ひさしぶりに食べたN店のラーメンはおいしかったです。発病前は頻繁に食べにいていたのに。

次の日でも私のお腹はびくともせず、逆に便秘気味になっていました。健康ってすばらしいと思いました。

18) 最後に

最初は「これらの手記は松本医院の自作自演でしょ」と感じてしまうこと(私

も始めそう思いました)について独自治療の詳細情報などもっといろいろなことを書く予定でしたが、9月中に提出して欲しいと先生からの要望があり、今日までしか書く時間が取れなかったため割愛しました。

また、私の感じたことをそのまま書いているために、H病院の先生がかなり悪いイメージに見えてしまっているのですが、西洋医学では薬によるコントロール以外には方法がなく、その方法を取らざるをえないのです。

先生には約2年半、お世話になったので、それだけでもほんとうに感謝しています。

(薬の副作用についてはもっと勉強して欲しいのと原因不明のことをむりやりこじつけた説明を止めて欲しいのですが)

ステロイドで一度治ったときには本当に自分のことのように喜んでくれました。もう1つ説明しておきたいことは「薬がもうない」というのは個人病院なのでここで扱える薬はもうないと言う意味です。

だから何とかしようとしてイムランで病気をコントロールしようとしたのです。ただ私には合いませんでしたが。そしてこの流れがなければ、私は松本医院までたどり着いていなかったと思います。誤解のなさないようお願いしたいのです。もう1つは、私は文中に「完治」という言葉を使っていますが、本当に完治したかどうかというのは誰にもわからないのです。なぜなら「完治」とは死ぬまでその病気での再燃が起こらないことであり、再燃しなかったということを証明するにはその方が亡くなるまで見届けて初めてわかることだからです。しかし少なくとも3年間、再燃していない方がいらっしゃるので、この言葉を使っても問題ないと判断し、使用しています。

また、私は潰瘍性大腸炎になりいろいろなことを経験し、学びました。そしてもっとも大きな収穫は以下の通りの気づきです。

病気は、将来このままではもっと大きな病気になってしまうという身体からのSOS信号です。そういう意味から私が潰瘍性大腸炎になってしまったのは必然だったのです。限界を超えたストレスがかかるなどの無理な生き方をし、高カロリー、高たんぱくなどの偏った食事をすることで過剰摂取による血液の汚れを生み出し、運動不足や身体の冷えにより免疫力の低下を招き、じわじわと私の身体は確実に蝕まれていきました。このまま行けばいつか、ガンなどの大きな病気にかかり、何の疑問も持たずにガンに対する3大治療を受け、もともと体力のない私は免疫に大ダメージを受け、短期間で帰らぬ人となっていたでしょう。

今では気づきをもたらしてくれた潰瘍性大腸炎に感謝しています。

最後に、私のたわごと?を記載していますので興味のある方はご覧ください。

たわごと

松本医院でのデメリットについて

- a) 費用が掛かる
- b) 多少難しい知識の理解が必要
- c) リバウンドがある
- d) 家族の理解と協力が必要
- e) 漢方を煮だしたりお灸を自分でやったりする治療に時間を要する

順に解凍していきましょう。

a) 費用が掛かる

(アベノミクスをマスコミははやし立てていますが、物価が上がるだけで、サラリーマンの給料があがらない限り日本経済はさらに悪くなるだけです。異次元の金融政策をやったところで日銀の黒田総裁が市中銀行から国債を毎月7兆円買い入れて、そのお金を日銀の印刷機で刷りまくって市中銀行にバラまいても、銀行は貸す企業がないので結局そのお金は市中に出回るどころか、日銀の当座預金に積み重ねられるだけで、全く意味がないのです。ましてや日銀が刷ったお金は、見かけは日銀の借金になるのですが、結局は最終的には日銀は国が経営している銀行ですから、最終的には国がその借金を返さざるをえなくなるだけですから、ますます隠れた財政赤字が増え続けるだけです。

確かに中国を経済的に封じ込めるために、アメリカが主導するTPPに日本が参加する見返りに円安にしてあげるということで突然に円安になり、国際競争力のある自動車や精密機械などの大企業は輸出が飛躍的に伸び、ホクホク顔であります。ところが日本は食料自給率が40%前後であるので、後の60%は輸入でまかなうしかありません。さらにエネルギーは原子力発電が完全に止まってしまっている現在では2~3%しか自給する力がありません。後の90%以上は石油、天然ガスをはじめとするエネルギーの全ては輸入によってしかまかなえないのです。そのしわ寄せは全て国民が背負わざるをえないのです。こんなときに来年4月から消費税は8%になり、ますます給与所得者の財布は薄くなるばかりです。

にもかかわらず当院はなぜ鍼治療や漢方風呂などの自費の分が必要になるのでしょうか？答えは簡単です。これらは全て免疫を上げることができるからです。最近新聞でお読みになったことがあるでしょう。医師が患者も診ないで鍼灸治療をするために、やたらめったら保険が使える許可証を発行し、それがバレて逮捕された医者とのニュースです。

確かに医師が鍼灸治療が必要であると認めたときには、鍼治療も保険が使えることがあるのです。しかし厳しい条件がいます。医者の治療では治せない病気だと認めた病気だけが保険医療が使えるのです。しかしながら私は全ての病気を治すことができるので、患者を見放す必要はありません。従って同じ病名では

鍼治療に健康保険が使えないのです。だからこそ鍼も自費にならざるを得ないのです。こんな条件なしに鍼灸治療も保険適用が可能になればいいのですが、今現在でも保険医療は破綻寸前ですから、厚労省と財務省は躍起になって医療費を減らそうとしているので、今後も全面的な鍼灸治療の保険は無理でしょう。

次に初診で行う血液検査で、特定疾患では使えない検査が当院では必要となります。それがアレルギー検査であります。アレルギー検査の必要性は皆さん既にお分かりでしょう。つまり膠原病である潰瘍性大腸炎やクローン病が治るということは、アレルギーに変えなければならないという道理です。例えばハウスダストやダニが運ぶ化学物質に対するIgEがどれだけであるかを見る必要があるのです。さらに見たいのはハウスダストやダニが運ぶ化学物質に対するIgGがどれだけあるかも見たいのですが、5年前は自費で可能であったのですが、現在はそんな検査さえできなくなっています。なぜならばこの検査の試薬を、どういふものか日本中の試薬検査会社が作ることをやめてしまったのです。残念です。患者の免疫がこのアレルギーに対してどのようにIgGにしていくかの経過を見ていけば、膠原病がアレルギーになっていく姿も手に取るように分かるのですが…残念です。このアレルギーの検査も特疾ではタダにはならないのです。

さらにこの患者さんが使っていたステロイドであるプレドネマ注腸をはじめ、他の全ての薬のアサコールやイムランやペンタサなどの抗炎症剤も、必ず副腎の働きを抑えているので、これらの薬によって副腎の働きにどのように影響があるのかを見る必要があります。なぜなら、突然にそれらの薬をやめると副腎機能不全でショックを起こすことがあるからです。従って副腎機能の働きを見るACTHやコルチゾールを見ていく必要があります。徐々に薬をやめさせ、このようなショックを起こさせないようにするとともに、突然にリバウンドが激しくなりすぎないように注意する必要があります。そのためにACTH、コルチゾールを検査するひつようがあるのです。これも特疾でもタダにはならないのです。

ACTHは、“Adreno Cortico Tropic Hormone”の略で、副腎皮質刺激ホルモンと訳します。これは脳にストレスがかかると脳の視床下部から出されるホルモンで、副腎皮質に例のステロイドホルモン、つまりコルチゾールというホルモンを出させて、既に述べたようにストレスに対抗させると共に、免疫の働きを一時的に抑える脳が作るペプチドホルモンです。つまり脳は、医者が合成ステロイドホルモンを投与すると副腎皮質が作っていると勘違いをして、フィードバックがかかって脳はACTHを作らなくなり、副腎皮質の働きがなくなっていくのです。そのとき医者が出したステロイドホルモンを急にやめると、副腎皮質機能不全となってショックが起こることがあるのです。だからこの検査も特疾では使えないのです。さらに潰瘍性大腸炎やクローン病の人は同時に外から見えない肺の膠原病である間質性肺炎になっていることもあり、その病気の診断の検査であるKL6、

SPA、SPDを見る必要があります。間質性肺炎については間質性肺炎の手記を読んでください。クローン病も潰瘍性大腸炎も間質性肺炎もリウマチもSLEもMCTDも皮膚筋炎もシェーグレンも、全て同じ病気であるので、そのような症状があるときにはこれらの検査をやります。しかし特疾ではタダにはならないのです。なぜならばこれらの病気は全て別々のものだと現代医学のお偉い方は考えているからです。

さらに膠原病の患者さんは全て免疫を抑えられてきますから、その間にヘルペスウイルスがどれだけ増えているかを見る必要があるのです。これも初診のときに自費で見る必要があるのです。なぜならばあらゆる難病の治療で免疫を抑え続けるので、ヘルペスが大量に増殖し、免疫が一瞬でも戻ればヘルペスと免疫が神経で戦うので、痛みを伴うあらゆる病気の原因のひとつであるにもかかわらず、現代保険医療はその検査を認めようとしないからです。

さらに保険で使える漢方生薬は量が決められています、量を増やす必要があります。その分も自費でもらう場合があるので高くなってしまいます。さらに膠原病の人は先程述べたようにアトピーになってくる人もいます。この傷を治す紫雲膏は保険が利かないのです。この紫雲膏の塗り薬はやけどしか保険が利かないのです。

私の医療は一生治らない病気を本当に治したい人にきてもらいたいので、あれやこれやと費用がかかるのです。しかしながら日本経済はますます中国や東南アジアに負けて下落していかざるをえないのです。ましてや真面目に一生懸命働きすぎている人だけが免疫を抑えてIBDである膠原病になってこられるのですから、今後できる限りこのような経済状況を配慮せざるをえなくなってきました。国民皆保険で私の医療を完全にタダにしてもらえれば、あらゆる膠原病は安心して自分の免疫で患者さん自身が治すことができるのに、残念です。絶対に治せない現代医療だけがタダになるのは理不尽だと思いませんか？しかも死ぬまで治らないような医療がタダになるのは間違い沙汰とは思いませんか？

皆さんご存知ですか？レミケードなどは1本が20万円もするのです！1ヶ月に2回もやれば40万円かかるのです。ざっと計算すれば1人の潰瘍性大腸炎やクローン病の患者さんにかかっている国庫負担は毎年500万円はかかっているのです。しかも死ぬまで治らない状況が変わらなければ、一体この負担は誰の肩に負わされることになるのでしょうか？国民です。残念です。

日本の財政赤字はGDPの240%に近づいています。つまり1220兆円を超えてしまいました。国民1人の借金は1000万円に近づいています。1家庭では3000～4000万円の借金を背負っている計算になります。今後とも化学物質が増え続

けている日本社会では、潰瘍性大腸炎やクローン病が減ることは絶対にありません。ますます特定疾患の国庫負担は増えるばかりです。どうすればいいのでしょうか？答えは簡単です。病気を治すのは患者さんの免疫であり、決して医者でもなく薬でもないことを徹底して周知させるべきなのです。国家財政が破綻すれば国民皆保険の存在も不可能になってしまうでしょう。悲しいことです。

複数の手記でも述べられている通り、費用がかさみます。漢方薬、鍼灸、漢方風呂は漢方薬の一部を除いて保険が効かないからです。松本医院に行くたびに、鍼灸を1回受けるように言われますので、これが1回4000円かかります。また、さらに家でもお灸をするように指示されますので、このお灸のもぐさに加えて、やカマヤミニという特製の加工もぐさ代が600個で8000円くらいです。そして特に初回は紫雲膏（赤い薬）と中黄膏（黄色い薬）も処方され、血液検査があり、要望または先生の判断により抗ヘルペス剤が処方されるからです。抗ヘルペス剤は現在1週間分であっても保険が効きません。

（この患者さんに潰瘍性大腸炎の治療中に抗ヘルペス剤を出したことはないのですが、潰瘍性大腸炎やクローン病の腹痛は全てヘルペスとの戦いによるものです。なぜなのかを詳しく説明しましょう。

腸管は粘膜でできているので、特別な粘膜の免疫の働きを持っています。しかも腸管はテニスコート1面の広さを持っています。つまり消化管は口から始まり、肛門で終わるのですが、この広い消化管は様々な中枢神経の支配を受けながらも消化管独自の神経系を持っています。そのために腸管は“第2の脳”とも言われたり、“腹の脳”とも言われるほど神経節が粘膜下に数多く張り巡らされています。ヘルペスの項を読めば分かるように、ヘルペスというウイルスだけは殺しきることができないのです。それはヘルペスが神経節という免疫の届かないところに隠れる能力を身につけたからだということは皆さん既にご存知でしょう。この神経節にヘルペスウイルスがゴマンと隠れているのです。

当院に来られる前の潰瘍性大腸炎やクローン病の治療は全て免疫を抑える薬を大量に投与されていますから、免疫を落とされている間に、この神経節から抜け出したヘルペスウイルスが腸管の神経線維の細胞（ニューロン）に増殖しまくっているのです。患者の免疫が回復したときにこのヘルペスと戦って腹痛が出るのですが、世界中の腸管の専門家は誰一人として知らないのです。残念です。さらに腸の蠕動をもたらす平滑筋に「アウエルバッハ神経叢（別名、筋層間神経叢）」が散在し、ここにもたくさん神経節があります。さらに腸粘膜には「マイスナー神経叢（別名、粘膜下神経叢）」があり、神経線維が網目状に走り、その線維が交わる部分に数個から数十個の神経が集まり、神経節を形成しているのです。このアウエルバッハ神経叢とマイスナー神経叢の2つを合わせて腸壁内神経叢と

ということがあります。これらの神経節にヘルペスが隠れているのです。最後に腸管には神経細胞の機能を持つと同時に、体液性の分泌細胞として働く細胞があり、これをパラニューロンという感覚細胞も散在しているのです。まさに腸管は一大宇宙を形成し、免疫学的にMALT(Mucosa-Associated Lymphoid Tissue)といい、日本語では粘膜関連リンパ組織といいます。このMALTと呼ばれる腸管の免疫とヘルペスとの戦いが、潰瘍性大腸炎とクローン病の腹痛の原因となっているのです。この真実は私だけしか知りません。)

そして5000円以上します。昔は1週間分だけなら保険が効いていたことがあったことが、松本医院に行くと手渡される冊子を読むとわかります。ではなぜ今は効かないのか。私は先生に質問しました。「わたしは医療界ではにらまれているからな」という予想通りの答えが返ってきました。(この“予想通り”の意味は理解しかねますが、とどのつまりはこのホームページで現代医療を批判し、医薬業界の過ちを指摘し、さらに医師会や医学会の悪口を言い続けているものですから、当然社会医療保険の団体からいじめられているという意味を彼は知っていたから、いじめられても当然という意味の発言であったのでしょうか。もっと穏やかに書けばいいのですが、バカな男です、アッハッハ!) 掛かる費用は初回は月4-5万、次からは3万くらいでしょうか。(彼は1ヶ月半で治りましたから、彼が払った全てのお金の合計はカルテを見て計算しますと、約5万円強でした。5万円ちょっとで一生涯治らない病気を治った訳ですから御の字ではないでしょうか?とにかく免疫を抑える余計な治療をやればやるほどリバウンドが長く続くので、結局医者が作った病気の治療をやることになり、免疫を抑えれば抑えるほど時間とお金がかかるのです。

潰瘍性大腸炎やクローン病の患者さんの皆さん、世界で唯一の免疫を上げる医療をできる限り早く受診され、自分で病気を治しましょう! この世に治らない病気は何もないのです。ガンは病気とは違います。ガンは老化ですから避けられないのです。)

2013/10/10

b) 多少難しい知識の理解が必要

これは松本先生の理論を理解するということです。必ず必要なことです。なぜなら治療する上でのリバウンドを乗り越えるため、これを知っていると知らないのとでは心の余裕度が違うからです。14)では私はすでにできていたので書きませんでした。が、「絶対に治る」と信じることはとても重要です。しかしこの理論を理解するのは容易ではありません。Naokiさんのブログを参考にするといいでしょう。

5/29のブログで図解入りの分かりやすく解説してくれています。googleで「潰瘍性大腸炎 Naoki ブログ」で検索です。

c) リバウンドがある

これが最大の難関です。

これにより治療を断念した方もおられるようです。

つまり今までかかった1)での費用も無駄になるということです。

しかし、これは松本医院の治療が本人にとって合わなかったということであり、その後に本人が西洋医学の治療を選んだとしても、それが間違いであるかどうかというのは本人が決めることです。本人がそれで納得しているのであればそれが正です。松本医院で治療を受けようと思っている方はこういうこともあるということをお勧めした上で診察に来るべきです。

d) 家族の理解と協力が必要

私は単身赴任者ですので1人で松本医院に行きましたが、できれば家族と一緒にいった方がいいです。私は1で行ったことを後悔しています。一緒に行って説明を受けたほうが、家族の協力を受けやすいです。金銭面でもそうですし、特に漢方風呂はお風呂が汚れるので始め私は家族に拒否されました。そして「治った」と言っても家族は半信半疑です。これは本人でないとわからない感覚です。例えば冷たい水を飲めば下痢をしていた私の腸は今では何をしてもびくともしません。17)の項目で書いたことからでもわかりますね。

e) 治療に時間を要する

家で行う治療のことです。漢方薬を煮出すのに、食前薬で40分(2日分)、食後薬で40分(2日分)かかります。始めはこの後始末が大変でした。大変なのは漢方薬を煮出した後の薬草の後始末です。最後は、お茶だしパック(フィルターパック)に漢方薬を入れて行っていました。これで後始末がぐんと楽になりました。また、お灸は始め1時間くらいかかっていました。これも最後は足とお腹のお灸を同時に行えることに気づき、30分に短縮できました。漢方風呂は2回30分煮出す必要があります、これも準備に時間がかかります。

そして私は週1で2時間浸かっていました(医院の指定は週2回)。

私は軽症だったので自分の勝手な判断で週1しかしていませんでしたが、症状の酷い方は医院の指定どおりにした方がいいと思います。

最後まで読んでいただきありがとうございました。